

---

**そう、僕は・・・。**

白兎

---

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

そう、僕は・・・。

### 【著者名】

白鬼

N6093E

### 【あらすじ】

「僕は幸せでした。願わくば、もっと一緒にいたかった」心は何にでもある。ただ、伝わるかどうかの違いだけ。

この家に来て何年経つだろう。

時が過ぎるのは早いな・・・。

この家の家族は3人。

随分とお世話になった。

お父さんはいつも笑顔で僕の元へ来てくれた。

お母さんは僕を自慢げに他人に紹介してくれた。

2人の子どものヨウ君にはよく蹴られてたっけ。  
昔はあんなに小さかったのに、今は立派な高校生。  
子どもの成長つて早いね。

今じゃ僕よりずっと大きいんだ。

そんな僕は今、家の庭にいる。

太陽の光が眩しい。

あ、お父さんだ。

何だか悲しそうな顔をしてる。

きっと僕がこの家を離れるからだ。

ありがとう。

もつね父さんの傍にはいられないんだね。

寂しいな・・・。

でも僕は泣かない。

泣けないんだ。

知らない一人の人間が来て、僕を家から遠ざけていく。

もうこの門を抜けたら戻っては来れないんだね。

さよなら。お父さん・・・。

あれ?

道の向こうからヨウ君が走つて来る。  
汗でシャツが透けている。

「父さん、俺、コイツをこの家に置いて欲しい!」

・・・え?

「・・・でも・・・流石に」

「頼むよ・・・」

「わざわざこの人達にも来てもらつたんだ。今さら・・・」

「父さんだってコイツのこと好きだろ?」

「・・・でも、引き留めてほしいあるんだ?」

「俺に任せてくれよ。」

「 どうせれば出来るもんだろう?」

「 パウがこんなに器用だったとは。驚いたよ

「中学生の時から得意なんだ、技術」

「そういえばそうだつたな。しかし・・・イスがミニテーブルになるとは」

「確かにコイツ、傷とか付いてたけどさ、やすりを使つたり、布で隠したりすれば何とかなるもんだよ」

「このイスはな、お前が生まれた記念に買った物なんだ。なのにお前と来たら蹴つたり、跳ねたりで・・・」

「はいはい、分かってるよ。とりあえず、俺に感謝だね」

「はは、本当にな

そんな会話が僕の上で聞こえた。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n6093e/>

---

そう、僕は・・・。

2010年10月29日13時35分発行